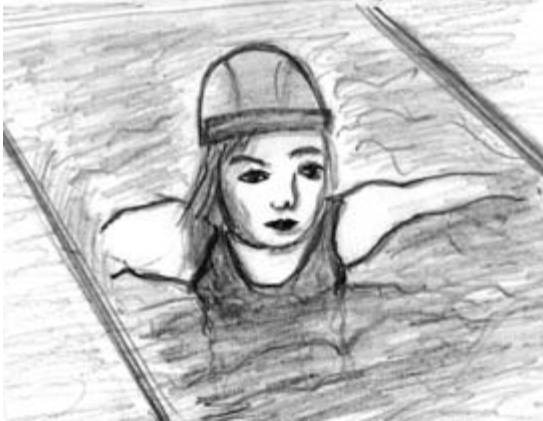


## みんなの童話

# つれしいおうえん



夏休み前の今日は、六年生の水泳大会がある日だ。

私はゆううつな気持ちで教室にいると、友だちのいくよが話しかけてきた。

「なみこ、水着を持ってきた？」  
「持ってこなかった。いくよは持ってきた？」

「泳がないから、持ってきてない」  
「選手の子が休んでいて、水着を

持っているよ、水泳大会に出場させられるかもしれないからね」  
「選手の子が、休んでいなければいいけど」

「選手以外は全員補欠だなんて、だ

れかが持ってきてるよ」

いくよと話していると、私の気持ちが楽になってきた。

担任の先生が教室に入ってきて、全員に話した。

「これから水泳大会だが、出場する子もいない子も、しっかりおうえんするように」

「はい」  
「ところで、補欠の子で水着を持ってきた子は手を上げてください」

補欠の子は泳げない子がほとんどだから、だれも手を上げなかった。そんなとき、私のおかさんが、入り口の前に立っていた。急いでお

かさんの所につかかった。

「何しに来たの」  
「げんかんに水着が置いてあったから、届けに来たのよ。水泳がんばりなさい」

おかあさんは、私に水着をわたすと、先生にえしゃくをして帰っていった。

先生が話してきた。

「なみこちゃん、水泳大会に出てくれないか。選手の子がおなか痛くなったと、言ってきたんだよ」

突然の話に、泣きそうになった。私は、息つきができません。だか

ら十メートルぐらいしか泳げないんです」

「だれも水着を持ってきていないから出てほしいんだ。泳げるところまで泳いであとは歩いてもいいから、最後までがんばってみよう」

私はその言葉に少し安心して大会に出る決心をした。

いよいよ水泳大会が始まった。どんどん競技が進むと、私のしんぞうの音が早く打ち始めた。

順番が回ってきた。  
プールサイドに立つと、クラスみんなのおうえんしている声が聞こえてくる。

「水の中からスタートしてもいいんだからね」  
「なみこ、泳げるところまでがんばれよ」

「なみこ、ファイト」  
「最後まで、歩いてもいいからね」

みんなの声を聞きながら、飛び込めるできない私は水の中で合図を待った。

「よいい、スタート」  
みんな一斉に飛び込む。

私も水の中に顔をつけた。  
かべを力いっぱいける。

息を止め、手と足を動かし続けた。  
「がんばれ！なみこ」  
「すごい！早いぞ」  
「一番でゴールだ！」

息が切れそうになり、水から顔を出した。

クラスみんなから、ため息やどなる声が聞こえてきた。  
「あと少しだったのに」  
「そこで立つな！」  
「早く泳げ！」

いくよの叫ぶ声も聞こえてきた。  
「仕方がないでしょ、なみこは息つきができないんだから、おこらないで、おうえんしなさいよ」

私は大きく息を吸い込み、また水の中に入っていた。

最後に顔を上げていた。  
おうえん席に戻ると、みんなが大きな拍手で迎えてくれた。

いくよが話してきた。  
「あと少して、一番のゴールだったのに、ざんねんだったね」

「私が一番？」  
「十五メートルのところで立ち上がったでしょう」

「うん、苦しくなったから」  
「そこまでは早かったんだよ」  
「え？ほんと！」

「このままだと一番でゴールだってみんなが大さわぎしてたんだ」  
私はうれしくなってきた。

「よし、今年は息つきが出来るようがんばって練習してみよう！」  
しろやま会員 杉本ゆみこ